

教職課程科目「特別活動の理論と方法」に関する考察

富 岡 勝*

A Study About a Teacher Training Course Subject “Theory and Methods in Special Activities”

(TOMIOKA Masaru)

はじめに

実践的指導力の養成を目的として1998（平成10）年の教育職員免許法施行規則によって必修科目となった「特別活動に関する科目」は、大学の教職課程における新分野として、新たな研究が次々に登場している。例えば、学生たちが学校行事のプラン作りと行事準備の指導を模擬的に体験する模擬学校実習行事を採り入れた「特別活動の研究」を実践しながらその学習効果を調査・考察した林幸克と長沼豊の研究¹、修学旅行準備の校務シュミレーションを実施してその効果を分析した森田健宏の研究²、グループ学習を積極的に取り入れた「特別活動論」の実践に関する福嶋智の研究³、学生に活動指導上の具体的なイメージを持たせるためにVTRを活用した「特別活動」の授業を実施した高瀬淳・三山緑・住岡敏弘・中嶋一恵・市田敏之の研究⁴、遠足・集団宿泊的行事にかかわる特別活動関連の新科目設定に向けて授業構成を検討した山本悟の研究⁵などがみられる。また、文部省の助成による特別活動に関する科目の教育内容・方法の開発研究として2000年に発表された、下田好行（信州大学教育学部）を代表とする研究⁶と愛媛大学教育学部の研究⁷もある。

こうした研究動向に刺激を受けながら、筆者が担当している近畿大学の教職課程科目「特別活動の理論と方法」の試みについて紹介し、その成果と課題に関して考察していく。

筆者は、2002年にも「学生による調査・発表を中心にした『特別活動論』の授業」⁸と題する論考を発表している。このとき公表した実践は、母校への訪問調査などの方法で学生自らが特別活動の現状について調査をおこない、その結果を授業で発表するという方法をとることで、生徒と教員の両方の視点から特別活動の実態とその意義や問題について認識させるとともに、

* 近畿大学教職教育部教授

〔キーワード〕 特別活動、教職課程、話し合い、学習指導要領、日本教育史

特別活動を積極的に実践しようとする意欲を高めることを狙いとしたものであった。そしてこの実践を検討して、特別活動の実態とその意義や問題について認識させるという狙いについては、ある程度の効果をあげたことを論じた。

しかし、2002年の論考執筆後、教職課程の履修者増加にともなって1クラスあたり約30名であった「特別活動論」の受講者数が1クラスあたり100名前後となる場合も生じ、学生に母校調査をスムーズに実行させるための指導に多くの時間と指導が必要となってきた。そこで、2007年に科目名称が「特別活動の理論と方法」に変更された頃より、母校調査以外の方法として、学生同士の話し合い活動の繰り返しによって特別活動に関する受講生の考察を深めさせようとする取り組みをおこなっている。本稿ではそうした取り組みとして、2013年度後期の月曜日4時限に筆者が東大阪キャンパスで担当した90数名の学生⁹が受講した「特別活動の理論と方法」¹⁰をとりあげる。以下、第1回授業で学生に配付した詳細なシラバス(以下、単に「シラバス」と呼ぶ)の内容を示して実際の授業内容を紹介しながら、考察を進めていく。

1. 授業の目標

この授業の概要と目標について、シラバスにおいて次のように記した。

■授業概要・方法等

特別活動は、固有の教育活動として、生徒の学校生活を支える重要な基盤です。特別活動とは何か。それが学校生活の中でどのような役割を果たしているのかを明らかにした上で、中学校および高等学校学習指導要領を用い、そこに定められている中学校・高等学校における特別活動の意義や内容、指導法について学習します。また、指導計画作成上の基本について、的確に押さえられるようにします。

この授業では、学生同士の話し合いや発表などの学生参加型の方法をとりいれます。

授業への出席を前提とした上で、定期試験、またはそれに代わるレポートの結果、その他の課題への対応(ほとんどの回で、授業中にミニツッペーパー(小レポート)に取り組みます)、発表状況等を考慮し、総合的に評価します。

■学習・教育目標および到達目標

この授業の教育目標は以下の通りとします。

- 1) 受講生が話し合いや発表などを通して生徒と教員の両方の視点から特別活動に関す

る考えを深め、特別活動を積極的に実践しようとする意欲を高めること。

2) 受講生が特別活動の意義および、各領域の内容・指導上の基本などを理解すること。

3) 受講生が特別活動の指導計画を作成するための基礎事項を理解すること。

具体的な到達目標は以下の通りとします。

1) 受講生が生徒と教員の両方の視点から、特別活動の実践について積極的に話し合いや発表ができるようになること。

2) 受講生が特別活動の意義および各領域の内容・指導上の基本、指導計画作成の基礎事項などを理解できるようになること。

(シラバスから)

つまりこの授業は、特別活動の意義・各領域の内容・指導上の基本・指導計画作成の基礎など基本事項を理解することとともに、2002年時と内容的に共通する「生徒と教員の両方の視点から特別活動に関する考えを深め、特別活動を積極的に実践しようとする意欲を高めること」を目標の中心にしている。

こうした目標のもとに、本授業では、「学生の特別活動体験の交流」（第1回授業）、「学習指導要領および特別活動の歴史と学生との接点」（第2回～第4回授業）、「他校実践の文献調査と意見交流」（第5回～第7回）、「設定場面での指導に関する意見交流と文章化練習」（第8回～第10回授業）、年間計画の試作と交流（第11回～第15回授業）の各段階のすべてで学生同士の話し合い活動を実施しながら授業を進めていった。学生の特別活動体験を出発点として大切にしながら、話し合い活動を中心とした授業を繰り返していくなかで他の受講生の経験、学習指導要領や特別活動の歴史、全国の学校での実践などに触れて視野を広げ、設定場面の指導に関する意見交流、年間計画づくりなどを経験して特別活動に関する考察を深めさせることを目指したのである。

以下、授業の各段階ごとに、授業の実施内容を紹介していく。

2. 学生の特別活動体験の交流（第1回授業）

第1回授業では、学生に自らの特別活動体験を振り返らせ、体験交流をさせた。これは、「生徒と教員の両方の視点から特別活動に関する考えを深め、特別活動を積極的に実践しようとする意欲を高めること」の基礎として、自らの特別活動体験を振り返ることが重要であると考え

たためである。

第1回 9月23日

オリエンテーション1 この授業の原則の説明

話し合い (これまでに経験した特別活動について)

1対1で話し合いを3回実施する。

「話し合い用カード」に自分の話す内容の骨子を箇条書きし、それを見せながら相手に説明する (二つのテーマについて1人2分間)

互いに説明したあと、互いのカードに記名つきで感想を書く。

テーマ1 「これまで経験した特別活動でもっとも印象に残っているものを一つ選び、その内容を紹介する」

テーマ2 「テーマ1で紹介した活動には、どんな意義があったと思うか」

(シラバスから)

なお、「これまでに経験した特別活動でもっとも印象に残っているもの」として学生が選んだ内容の内訳は以下の通りであった。

文化祭 32名 (内、演劇7名、合唱コンクール3名)

体育祭 12名

修学旅行 8名

職場体験 6名

球技大会 5名

生徒会 4名

(以下、2名以下)

地域清掃、ウォークラリー、海外研修、全校音楽会、高校野球の応援、委員会活動、社会見学 (小学校)、クロスカントリー、ディベート大会、スプリングキャンプ、クリスマスミサ、部活動

文化祭と体育祭を「もっとも印象に残っているもの」に挙げる学生が多かったことが分かる。

文化祭と体育祭を中心とした受講生の特別活動体験をもとにして、学生の特別活動に関する視野をどのように広げさせ、どのように考察を深めさせていくかということが以後の授業の課題となる。

3. 学習指導要領および特別活動の歴史と学生との接点（第2回～第4回授業）

第1回授業で振り返った特別活動体験を深めるために、第2回授業ではその特別活動体験が学習指導要領の中のどのようなキーワードと結びついているのかを検討し、第3回・第4回授業では、特別活動の歴史と学生の特別活動体験とを比較することで特別活動に関する受講生の視野を広げさせ、特別活動体験の特徴について改めて考えさせようとした。

第2回 9月30日

オリエンテーション2 「授業方針の詳細」プリント配付説明。

学習指導要領における特別活動1

第3回 10月7日

学習指導要領における特別活動2（戦後の特別活動の流れ）

第4回 10月21日

特別活動の源流（戦前期）

（シラバスから）

第2回の検討テーマ「現在の中学校学習指導要領における特別活動のなかで、もっとも注目した用語とその理由」についての学生の挙げた結果は以下の通りであった。

「人間関係」 16名

「望ましい集団活動」 11名

「学校行事」 9名

「自主的・実践的な態度」 8名

「体験活動」 6名

「生徒会活動」 6名

「学級活動」 6名

「旅行・集団宿泊的行事」 5名

「ボランティア活動」 4名

「文化的行事」 4名

「儀式的行事」 3名

「健康安全・体育的行事」 3名

「創意工夫」 3名

(以下、2名以下)

「思春期の不安や悩みとその解決」、「奉仕的行事」「自己を生かす能力を養う」、「個性」、「社会参加」、「ガイダンス」、「自治的な活動」、「教育相談」、「道徳教育との関連」、「人間としての生き方」

受講生たちが数多く注目した「人間関係」「望ましい集団活動」「自主的・実践的な態度」といった語句は、中学校学習指導要領で述べられている「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」という特別活動の目標に含まれているキーワードであった。

第3回授業では、各時期の学習指導要領における特別活動・特別教育活動・自由研究に関する記述を概観して戦後の特別活動的な活動の流れを学ばせた上で、「これまで経験した特別活動で「公民としての資質」を高めることのできた経験とは？」という問いを発して、戦後初期からのキーワードである「公民としての資質」と学生自らの体験とを関連させて考察させた。

受講生たちが挙げた「公民としての資質」とつながっている自らの特別活動体験は、以下のようなものであった。

「文化祭」 14名

「生徒会活動」 13名

「部活動」 13名

「地域清掃」 7名

「学校行事」 7名

「委員会活動」 5名

「職場体験活動」 5名

「学校行事」 4名

「遠足」 3名

「体育祭」 3名

(以下、2名以下)

「社会福祉施設の訪問」、「音楽祭・合唱コンクール」、「球技大会」、「社会見学」「裁判見学」、「地域新聞づくり」、「総合的な学習の時間での地域学習」

受講生たちの文章による考察を3例紹介したい。

文化祭での学級活動 クラスのみんなが平等に参加し、楽しむことは当然ながら、イベントに参加しているすべての人を楽しませることも大切。今思えば委員長を中心に、先生の指導だけでなく、自分達で意見を出し合い計画を立てていた。意見が出ないときもあつたり、議論することもあった。自分のことばかり考えていては話し合いは進まない。このように他の人のことも考えながら議論に参加する。気づかないうちに公民としての資質を高めることができていたと思う。

公民としての資質を高める経験としては、小中高での児童会・生徒会の会長・副会長等の選挙があった。立候補者が多数に向けて意向を演説し、推薦者が立候補の客観的な立場からの意向や良さを述べ、その中から生徒自らが候補者から選出するという点で民主的であり、公民としての資質が高まったと思う。

遠足は小・中・高すべてで経験した特別活動だったが、すべて目的は同じようで異なっていたように思う。小学生の時は、友達を増やす練習、集団行動の練習、自然や動物とのふれあいなど豊かな人間性を身に付けること。中学生の時は、友達と時間を共有（スポー

ツや歴史の遊び) することと野外活動や役割分担での仕事の責任感や目的達成の達成感を体験させる人の感情や気持ちの教育をすること。高校生の時は、社会的常識やマナーを身に付けるとともに、小・中の応用で、いかに社会に出た時に通用するかを考えること学ぶことを感じさせることが目的。最終的には今回のテーマ「公民としての資質」につながっていると思う。生まれつき資質を持つことは少なく、ほぼすべてが大人になるまでの教育が公民としての資質を学ぶものになっていると思う。その中でも心の広い人間教育ができるといった点でも遠足というものが一番良い経験ができた。

こうした考察から、自らの特別活動体験と戦後の特別活動史がばらばらに存在するのではなく、両者には接点があることを自覚した受講生がいたことがわかる。

第4回授業では、旧制高校生の寄宿舎や部活動における自治的活動の様子を映画「北辰斜めに」の一部を通して紹介し、「旧制高校生の学校生活と比較して、現在の特別活動ならではの特徴とは何か」について考えさせた。この回の授業は、筆者の行っている旧制中学校や旧制高等学校の生徒の自治的活動に関する教育史研究における知見を活かしたものとなっている。学生3名の考察を紹介する。

現在は旧制高校と違って、男だけでなく男女共学で特別活動を行っている。旧制高校は運動などを中心にしてきたが、現在では、ボランティアや地域との連携に積極的に取り組んでいる。

現在の特別活動ならではの特徴は、男女が一緒に活動するところや協調性や平等を重視しているところだ。旧制高校のように経験者である先輩を重視するのと、現在の特別活動のように全員を平等に扱うのとは、どちらがいいかわからないが、両方良い点、悪い点があると思う。

現在の特別活動では教師の指導の下に生徒たちが社会に出て必要な教養などを得られるようになっているが、旧制高校では教師の監督がないため、社会の常識から外れたものになってしまうこともある。旧制高校のように教師がまったく関与しないのでは、生徒達が、

自分は何をしてもとめられることがないので、自分の意志をいつでも、どんなことでも発してしまうことになってしまい、生徒にとっても良くない。現在の特別活動は、社会のことを知っている教師とともに生徒が自主性を学ぶことができる点に特徴がある。

このように、第4回までの授業を通して、受講生に自らの特別活動体験を振り返らせ、他の受講生の経験と交流させ、現在や過去の学習指導要領のキーワードとの関連を考察させ、さらに戦前の学生の課外活動との比較考察もさせようと試みた。そして、少なくとも一定数の学生はこうしたプロセスで自らの特別活動体験に関する視野が広がり、考察を深めたといえそうである。

4. 他校実践の文献調査と意見交流（第5回～第7回）

第5回から第7回の授業では、文献資料を使って全国の実践例を調査・考察する宿題レポートを通して更に多様な実践例に触れさせながら、受講生の特別活動に関する視野をさらに広げさせようと試みた。

宿題レポート（第5回授業で提出）

「特別活動の実践例を図書、インターネット、新聞などで一つ選び、内容、指導法について紹介し、その実践の意義について述べること」。できるだけ具体的に記述すること。字数は800字以内。必ず資料の出典（たとえば図書なら「著者名、図書名、出版社、刊行年、〇頁～〇頁」、インターネット（責任者の不明確なサイトだけではレポートにならないので要注意!）なら、「作成者、サイト名、URL、閲覧日」）をレポート末尾に記すこと（字数の計算外）。A4サイズ横書きの原稿用紙（20字×20行のマス目。市販のもので可）に原稿用紙の書き方を守り、手書きで作成すること。

第5回 10月28日

宿題レポートの提出と、話し合い。

第6回 11月11日

学級活動の現状と改善について

第7回 11月18日

生徒会活動・学校行事の現状と改善について

(シラパスから)

第5回授業では、2人1組での宿題レポートの相互発表を2回実施したあと、「他の人の宿題レポートに触れてわかったこと、考えたこと」について考察させた。学生の考察例（3件）を紹介する。

2人の話、そして自分のレポートを含めた共通点は、「生徒の自主性を育む」というところだと思いました。方法は違っても、自分の考えを主張し、周りの人の主張を聞くこと、そして協力し合うことの大切さを身に付けることが特別活動の授業をおこなう意義だと思いました。

特別活動においては、“生徒の自主性を育てる”機会を設けることができるものが多いように思いました。しかし同時に、このように協力を必要とする場面で必ず出てくるであろう、“やろうとしない生徒”への対処はどうすべきか、の疑問が出てきたので、ペアになった人と共に考えてみました。なかなか難しい問題で、注意を促すより他の有効な手段がありませんでした。これについては、また深く考えるべき課題であると感じました。

話し合いを通じて、特別活動が多岐にわたるものであるのを改めて感じた。私が特別活動と聞いて思い浮かべたのが、職場体験や学祭といった、ある意味王道だったので、学級のちょっとした取り組みや、いじめについての学校の取り組みなど、自分とは違う目線からの切り込み方を聞いて、新鮮だったし、視野が広がったような気もした。

さらに第6回と第7回の授業では、受講生たちの宿題レポートから2例ずつ選んで、授業資料に用いて、その事例から分かったことと考えたことを自らの経験と比較しながら、話し合いを実施させた。

5. 設定場面での指導に関する意見交流と文章化練習（第8回～第10回授業）

第8回と第9回の授業では、第7回までの授業を発展させ、特別活動の実践に関するある場面を設定して指導方法などについてなるべく具体的な話し合いをさせ、短時間で文章の一部を書き始める練習を実施した。第10回授業では、第8回・第9回のような場面指導に関する考察を、定期試験と同様の60分間で論述させることを通じて思考を深めさせようとした。

第8回 11月25日

学級活動の意義と指導法（場面を設定してグループ討論）

第9回 12月2日

生徒会・学校行事活動の意義と指導法（場面を設定してグループ討論）

第10回 12月9日

特別活動の意義と指導法のまとめ／中間小テスト（定期試験の練習を兼ねる）

（シラバスから）

第8回と第9回で設定した場面は、次のようなものであった。設定場面として書かれていない条件（例えば、その学校の規模、特徴、雰囲気など）は、受講生が自由に考えてよいことにして、なるべく具体的な意見を引き出すように心掛けた。

（第8回授業での設定場面）

教員になって2年目のA教諭は、B中学の1年4組担任です。A教諭は学級での話し合いが集団づくりの基礎だと考えていますが、5月の後半になっても、生徒から意見がなかなか出ない状況です。6月にはクラスとして文化祭で何に取り組むかを決める必要がありますが、このままでは不安です。あなたがA教諭ならどのように指導していきますか。

（第9回授業での設定場面 二つの場面から選択）

A中学校で役員の変更がおこなわれたばかりの5月、生徒会による無記名アンケート「生徒会に何を期待するか」の回答のなかに「いじめのない学校にしたい」という意見が

ありました。これを受けて役員の生徒たちは何か行動したいと思い、生徒会顧問であり2年生担任のB教諭に相談に来ました。あなたがB教諭なら、どのように対応しますか。

4月にA中学校2年生の学校行事を担当することになったB教諭は、昨年度は1年生の学校行事を担当していました。昨年度の1年生は例年に比べ、芸術鑑賞会への参加態度が不真面目な状態でした。そこでB教諭は今年こそはこの状況を改善したいと考えました。あなたがB教諭なら、どのように取り組んでいきますか。

また第8回より、これまでの2人1組形式ではなく、4～6名ほどのグループで話し合いをさせた。通常、いきなりグループ活動をさせると学生たちはグループ討論にあまり慣れていないため、全員が充実した話し合いをおこなう、ということは難しい傾向がある。しかし、それまでの授業での2人1組形式での話し合いを通して、自分の意見を誰かにしっかりと聞いてもらえる経験を重ねていたため、第8回からのグループ討論では、メンバーのほぼ全員が互いの意見をしっかりと聞き合うということができていたように思われた。

第10回の中間テストの問題は、第8回と第9回と同様の設定場面による問題と、その設定場面に登場する活動の意義を学習指導要領の言葉を使って説明させる問題の2題を出題し、60分かけて800字の文章にまとめさせた。設定場面を用いた話し合いを第8回と第9回で重ねていたため、受講生たちは、予想以上にスムーズに中間テストの答案を作成していた。

6. 年間計画の試作と交流 (第11回～第14回授業) (1,200字)

第11回からは、受講生に特別活動の指導計画として学級活動の年間計画を作成させた。これによって、受講生が指導計画を作成するための基礎的な知識を吸収するとともに、第8回から第10回でとりあげたような設定場面を考察する上で、年間単位の見通しを持ちながら、その場面での指導を考えていけるようになることを目指した。

第11回 12月16日

指導計画の作成に関する解説

第12回 12月23日

指導計画の発表

第13回 1月20日

朝の10分間読書活動とブックトークについて

第14回¹⁾ 1月27日

中間小テストの解説・返却／まとめ

定期試験

(シラバスから)

受講生たちがつくった計画の特徴を紹介するために、各受講生がまとめた「作成した年間計画の紹介」(キーワード3つ、上手く書けたと思う点、書くのに苦心した点)をいくつか示したい。

例1 (中学1年生の学級活動年間計画について)

(キーワード1) 集団や社会の一員としてよい生活を作ろうとする自主性

(キーワード2) 自分には今、何ができるかを考えて自分自身を生かす能力を養える。

(キーワード3) お互いに個性を理解することができる。

(上手く書けた点) 中学1年生で入学して間もない4月に何をしたらいいか?でクラスで初めて団結する機会として縄跳び大会を開くところ。

(苦心した点) 6月と7月あたりは、みんながクラスに慣れて来て、特に大きな行事もないので、何をするか迷ってしまった。しかし期末テストが残っているので勉強会を開くという結論になった。

例2 (中学1年生の学級活動年間計画について)

(キーワード1) 個人個人の人格形成

(キーワード2) クラスみんな仲良くなる

(キーワード3) みんな仲良くなることで、協調性や相手のことを考えられる力をつける

(上手く書けた点) 大会を多くして、クラスで団結する力をつけるイベントをふやす。勝敗を競うので、生徒の闘争心をもやす。→ クラスの仲が良ければ良いほどみんながんばってくれると思うので、クラス全体が仲良くなるような行事を多くした。

(苦心した点) 中学校で、授業も決まっているし何をするにしても学年単位なので、あまり自由すぎる行事はできなかった。また、6月が雨の季節なので何をするか迷った。雨を生かして何かできるか。

例3 (高校1年生の学級活動年間計画について)

(キーワード1) 生徒の個性をのばす。

(キーワード2) 集団生活に適応する(社会性、コミュニケーション力)

(キーワード3) 実践的な態度の養成

(上手く書けた点) 上記の学習指導要領のキーワード3点の目標を、どれも高いレベルで達成できるカリキュラムを作成した。上記の3点以外にも、現代社会で生きていく上で必要なスキルを身に付けていけるようなカリキュラム、また細かい配慮を書けた。

(苦心した点) 個性をのばすことと社会性をのばすことの両立が衝突してしまう時もあるので、いかにそれを避けられるカリキュラムを作れるのか。

例4 (高校1年生の学級活動年間計画について)

(キーワード1) 集団の一員としての自覚を持ち、より良い人間関係を築き上げられるようなクラス

(キーワード2) 誰かが困っていたら、協力し合い、お互いが相談に乗り合えるクラス。

(キーワード3) 話し合いの時はお互いに意見を言い合い、必要な時には注意し合えるクラス。

(上手く書けた点) 最初の方にやる、アイスブレイクや学級目標作り、遠足などで緊張も解けて、親しみやすくなるんじゃないかと思った。

(苦心した点) 上記のようなことを実現しようとすれば、信頼関係が大切だと思うので、信頼関係を築いていくためにはどういう活動をすればいいのか難しかった。

なお、学級活動の活動を実際に体験しながら意義や課題を考えるという目的から、毎回の授業の冒頭を使って10分間読書活動を実施していた。第13回はその10分間読書活動を応用したブックトーク活動を実施しながら、他にどのような応用的な活動が可能かどうかを話し合った。

以上の授業を経て実施した定期試験では、中間試験同様、設定された場面における指導に関する問題と、その設定場面の活動の意義を学習指導要領の言葉を用いながら説明させる問題の2題を出題し、60分かけて800字の文章にまとめさせた。具体的には以下のような問題文を出題した。

(定期試験問題)

まず、学級活動として球技大会に取り組む意義について、学習指導要領の用語を盛り込みながら3点にわたって説明しなさい。次に、5月の学年球技大会への取り組みを1年間の学級づくりの一環として重視している中学1年生の担任A教諭として、どのような指導を行うか、事前・事後の指導も含めて述べなさい。(合計721字以上800字未満で原稿用紙に手書き。字数計算は原稿用紙の方式による)

受講生たちの多くは、第11回からの授業で学級活動の年間計画作成も経験したため、設定された場面において、その活動の意義を自覚し、年間の見通しを持ちながら、具体的な指導について述べることができるようになっていた。

7. 成果と課題

以上紹介してきた筆者担当の2013年度後期月曜4限「特別活動の理論と方法」の授業について、第13回授業(1月20日)に実施した授業評価アンケートを手がかりにしながら、その成果と課題について考察していきたい。

授業評価アンケートは、教職教育部共通の形式で、以下の5段階または10段階の数値評価の19設問と、文章での記述欄から構成されている。受講生が記入したアンケート用紙は、教員の目に触れないように学生の手で回収され直ちに大学の教職課程担当事務部署(学務部)へ提出され、成績報告後に集計結果が教員の手許に届くようになっている。

まず各設問の内容を紹介する。

(授業評価アンケートの設問内容)

- 設問1 授業の内容は理解できましたか。
- 設問2 教員の説明のしかたは分かりやすかったですか。
- 設問3 教員の話し方は明瞭でしたか。
- 設問4 黒板の文字やパワーポイントなどの資料の提示は明瞭でしたか。
- 設問5 教員はクラスの勉学の雰囲気を保つように努めていましたか。
- 設問6 授業に刺激され授業内容に興味を持つようになりましたか。
- 設問7 授業はシラバスどおりに進められましたか。
- 設問8 教員は授業の準備を十分にしていましたか。
- 設問9 授業に対する教員の熱意を感じましたか。
- 設問10 教員は学生の質問、疑問、意見をくみとってくれましたか。
- 設問11 教員のあなたがたへの接し方は適切だったと思いますか。
- 設問12 あなたは授業中に集中し、私語や授業に関係のないことをしないように心がけましたか。
- 設問13 あなたはこの授業の予習または復習をしましたか。
- 設問14 この教員の授業を10点法で評価してください。
- 設問15 授業で使用した教室の設備・環境は良かったですか。
- 設問16 教育を担うための基礎的教養や使命感が身につきましたか。
- 設問17 この授業を受けて、学習意欲が高まりましたか。
- 設問18 教職に就こうとする意思が高まりましたか。
- 設問19 教育実習あるいは介護等体験などに求められる知識や実践力の基礎が身につきましたか。

第14問以外の設問に関する評価方法は5段階評価で、5が「非常にそう思う」、4が「そう思う」、3が「どちらとも言えない」、2が「そう思わない」、1が「全くそう思わない」である。第14問は10点(最も高い場合)から1(最も低い場合)の10段階評価である。

本稿で紹介した授業の結果は、東大阪キャンパスの教職教育部開講科目の平均値と比較すると、設問14以外の各設問の結果は、東大阪キャンパスの平均値(各設問3.5から4.2)と同じ値であった。10段階評価の設問14は東大阪キャンパス平均値が8.2であったのに対して本稿の授業

が8.0という結果であった。本稿で紹介した授業に対する学生からの授業評価は数値的には平均値よりもわずかに下回っていたと判断できるだろう。ただし同じ時期の火曜日2限に同じ内容で筆者が担当した授業のアンケート結果を見ると、10段階評価で8.4であり、東大阪キャンパス平均値を0.2ポイント上回っている。クラス人数の影響を受けずに学生の理解度や満足度を上げるにはどのようにしたらよいか、今後考えていきたい。

文章での記述欄は、「この授業の10点法で評価した理由」（設問14の評価理由）、「この授業で良いと思った事」「この授業で改善が必要だと思った事」の3種類であった。記入するかどうかは学生の自由に任されていたが、3種類の欄に計51の意見が書かれていた。以下、意見毎に番号を付けながら、省略せずに全て引用する。

（文章に記述欄に書かれた意見）

「この授業を10点法で評価した理由」

（意見1、評価10点） 分かりやすかった

（意見2、評価10点） 話し合いや映像などで様々な意見が聞けて参考になった。

（意見3、評価10点） 行動して学ぶ授業であったから楽しかった。

（意見4、評価10点） 毎日考えさせられる授業で、とても勉強になります。

（意見5、評価10点） とても分かりやすい授業でした。

（意見6、評価10点） 授業が楽しかったから。

（意見7、評価9点） 読書の時間があるのはいいと思う。

（意見8、評価9点） いろいろな人の意見が聞けておもしろかったから。

（意見9、評価9点） 特別活動についていろいろなことを考えられたのでよかったです。

（意見10、評価9点） 色んな人と話し合える良い授業だと思いました。

（意見11、評価9点） 2人1組での話し合いだけでなく、グループを組んでの話し合いもあってよかったです。

（意見12、評価9点） 10分間読書が楽しかったです。授業中に見たビデオがすごくよかったです。

（意見13、評価9点） 教師になった時の対応などが学べてよかった。

（意見14、評価9点） 説明が丁寧でわかりやすい。

（意見15、評価9点） とても良かったから。

- (意見16、評価 9 点) 10分間の読書時間が良かったです。
- (意見17、評価 9 点) 努力した分を評価してくれるのはうれしい。
- (意見18、評価 9 点) グループ活動が多くて色々な価値観に触れられる。
- (意見19、評価 9 点) 話し方が明瞭でやっている内容も分かりやすく楽しかった。
- (意見20、評価 8 点) 説明が分かりやすい。
- (意見21、評価 8 点) (教室が) 寒かった。
- (意見22、評価 8 点) 話し合いカードを自分で書くことで、整理もできてよかった、と思います。
- (意見23、評価 8 点) よい雰囲気が進められていたから。
- (意見24、評価 8 点) わかりやすくグループワークが多かったのがよかったです。
- (意見25、評価 8 点) 声がよく聞こえました。
- (意見26、評価 8 点) プリントで前回の他の人の意見を知ることができたから。
- (意見27、評価 7 点) 読書活動(10分間)が非常に良かった。
- (意見28、評価 7 点) レポートや中間課題は多いのに、それに対する評価の割合が少なすぎると思う。
- (意見29、評価 7 点) 10分読書より10分早く帰りたい。
- (意見30、評価 7 点) 話し合いが多く、自分で考えることが多かったと思う。教室が急に代わったのはこまった。
- (意見31、評価 7 点) 話し合いの場をたくさん持てて刺激的な授業内容だった。
- (意見32、評価 7 点) 講義前後のあいさつは気が引き締まって良かった。教室は寒かった。
- (意見33、評価 7 点) 毎回違う人と話し合いや、グループ活動ができたから、色々な人とコミュニケーションがとれたり、考え方を聞くことができた。
- (意見34、評価 6 点) ふつうの講義だった。
- (意見35、評価 6 点) 話し合いが多過ぎたのがあまり好きではなかった。

「この授業で良いと思った事」

- (意見36) グループディスカッションや1対1で話す活動が多く楽しかった。
- (意見37) あいさつをする所
- (意見38) 10分間読書が良かった。話し合いが良かった。

(意見39) 話し合いによって自分で考えていくことが多いところ。

(意見40) 読書時間。

(意見41) グループ活動は色々な人とふれ合うにとどまらず、人見知りなどの改善につながるという意味でも良かった。

(意見42) ディスカッションが多くていろんな人の意見や体験が聞けておもしろかったです。

(意見43) 板書が少なかったから退屈しなかった。

(意見44) グループ討論などがたくさんある。読書があるから、小説などに興味があらわれた。

(意見45) 授業始まりと終わりのあいさつ。10分間読書。見せられたビデオの内容。

(意見46) 読書活動があることは良かった。

(意見47) 話し合いの時間。

「この授業で改善が必要だと思った事」

(意見48) 教室がでかすぎると思った。

(意見49) 部屋 (の PA 装置) がキーンと鳴っててしんどかった。

(意見50) 空調管理。

(意見51) 教室が広すぎて声が聞き取りにくかったので、マイク等音響の改善が必要だと思った。

以上の文章で記述された意見を見ると、この授業の大きな特徴である話し合い活動の積み重ねという点に関する好意的な意見が多かった点が指摘できる。話し合い活動について、意見36のようなやや否定的な意見もあったが、肯定的な意見は15件を数えた¹²⁾。

また話し合い活動を効果的に進めるために、意見の要点などを記録させていた「話し合いカード」を集めて後日返却していたが、これを効果的だとする意見も2件あった(意見22・意見26)。

このような授業評価アンケートの結果から、話し合い活動を繰り返しながら特別活動に関する学生の視野を広げさせ、考察を深めさせるという授業スタイルについて、積極的な姿勢を示す学生が多かったことが分かったと言えるだろう。このことから、本稿で紹介した「特別活動の理論と方法」の授業の取り組みは、特別活動に関する話し合いを徹底して繰り返しながら学生

の考察を深めさせるという授業の進め方について、一定の展望を切り拓いたという点で成果を認めることが可能であろう。

課題もちろんある。学生の授業評価アンケートだけでなく、定期試験の答案を詳細に分析し、受講生の承諾を得て答案の一部を公表しながら、受講生の特別活動に対する考察の深まり具合を示さなくては、この授業が本当に成果を挙げたかどうかを実証することは難しいだろう。

また、特別活動に関する学生の視野を広げさせ、考察を深めさせるための教員側の働きかけとして、実際の学校現場における質の高い実践を受講生たちにもっと伝えていくことができれば、この授業は更に有意義なものになっていくのではないかと考えている。そのための準備として、特別活動に関する現場教員によるいくつかの研究会に参加し始めているところである。研究会などに参加して現場の実践に触れて学んだことを大学の授業に効果的に活かす方法を考えていきたい。

(注)

- 1 および長沼豊・林幸克「教職課程科目『特別活動の研究』の学習効果の測定」(『日本特別活動学会紀要』第14号、2006年)および林幸克・長沼豊「教職課程科目『特別活動の研究』の学習効果に関する研究—模擬行事实習の教員役と生徒役による差異に着目して—」(『日本特別活動学会紀要』第16号、2008年)。
- 2 森田健宏「『特別活動の指導法』における校務演習の導入と実践的指導力に対する学生の自己評価」(『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』第3号、2010年)。
- 3 福嶋智「教職課程カリキュラムの授業改善に関する事例研究(1)—『特別活動論』におけるグループ学習—」(『神奈川大学心理・教育研究論集』第25号、2006年)。
- 4 高瀬淳・三山緑・住岡敏弘・中嶋一恵・市田敏之「実践的な教職課程の充実にむけた教職に関する科目『特別活動』の取り組み」(『人間生活学研究』第11号、2004年3月)。
- 5 山本悟「小学校特別活動の指導法に関する授業構成の検討～遠足・集団宿泊の行事にかかわる新科目の設定に向けて～」(『児童教育実践研究—十文字学園女子大学人間生活学部児童教育学科児童教育専攻紀要』1(1)、2008年)。
- 6 下田好行(研究代表)『『特別活動の理論と実践』における教育内容・方法に関する開発研究』(文部省助成による教育課程における教育内容・方法に関する開発研究「教育課程及び指導法に関する科目・特別活動の指導法」部門平成9年度～11年度研究報告書)、2000年3

月。

- 7 南本長穂（研究代表）『「教育課程における教育内容・方法の開発研究」開発研究事項「特別活動の指導法」』愛媛大学教育学部、2000年3月。
- 8 拙論「学生による調査・発表を中心にした「特別活動論」の授業」『教育論叢』（近畿大学教職教育部）第14巻第1号、2002年10月。
- 9 定期試験の出席者93名のうち、学部別内訳は、法学部14名、経済学部17名、経営学部13名、理工学部13名、文芸学部36名、短期大学部1名であった。また学年別内訳は、1年生75名、2年生14名、3年生5名、4年生0名であった。受講生には文系学部の学生が多く、1年生が多い授業であったといえるだろう。受講者の学部内訳は、各学部の専門科目との重複の有無によって変化する。また、「特別活動の理論と方法」は1年生後期から受講可能な科目であるから、本稿で紹介する2013年年度後期の「特別活動の理論と方法」受講者に1年生が多いことは不思議ではないだろう。
- 10 近畿大学（東大阪キャンパスおよび農学部キャンパス）の「特別活動の理論と方法」は、1年生後期から「教職入門」の単位を修得し終えていることを条件に履修できる科目であり、中学校免許取得のための必修科目である。
- 11 本学では授業を15回分実施しているが、2013年度後期の月曜日は、本来の第1回授業日であった9月16日が暴風警報発令で臨時休講となったため、特例として、第15回は実施せず、第14回までの授業の内容調節と補充レポートなどによって対応した。
- 12 以下の意見は、話し合い活動に対する肯定的な見解ととらえることが可能であろう。意見2・意見3・意見8・意見10・意見11・意見18・意見24・意見30・意見31・意見33・意見36・意見38・意見39・意見41・意見44・意見47。